

5.1.5 国内研修・国内交流

① 第3回北陸新幹線サミット

一昨年度から開催されている「北陸新幹線サミット」へ参加。本校からは日本語による発表4グループ、英語による発表1グループが参加。各分科会で専門家や高校生とディスカッションを行い、研究への視野を広げた。なお、主催の長野県上田高等学校は秋に本校を来訪し、課題研究を通じた交流を行った。

(1) 目的

北陸新幹線沿線の都県のSGH校を主な参加校として、長野県上田高校の主催で「北陸新幹線サミット」が開催された。課題研究を進めるにあたり、東京からの視点だけに偏ることは自らの研究の可能性を狭めることにつながる。中部・北陸といった東京近郊以外の高校生の中で自らの研究について発表し、ディスカッションを行うことによって、研究に新たな視点を加え、それぞれの研究を深化させ、生徒同士のネットワークを図ることを目的とする。

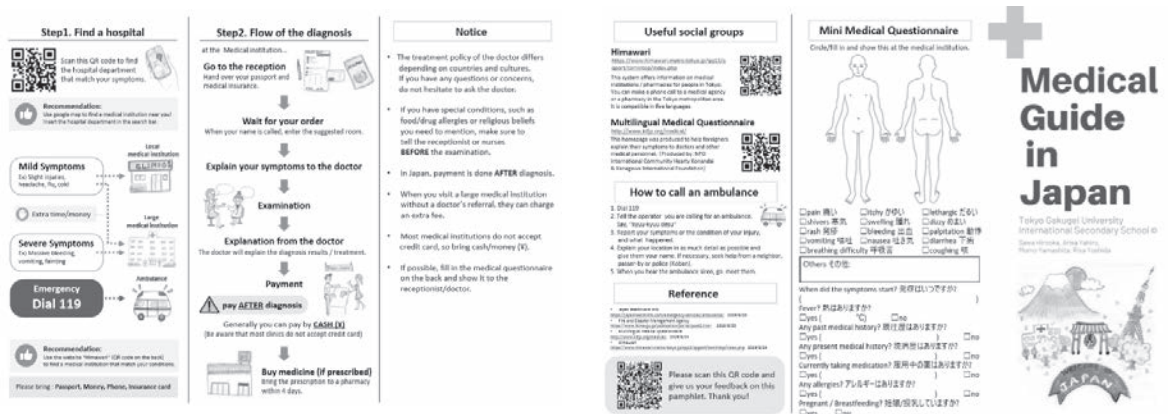
(2) 実施概要

- ・主 催 長野県上田高等学校
- ・後 援 JICA（国際協力機構）・JR 東日本長野支社
- ・開 催 日 令和元年6月22日（土）
- ・会 場 長野県上田高等学校（長野県上田市大手1-4-32）
- ・参 加 者 約100名
- ・使用言語 日本語 および 英語
- ・日 程
 - <行き>
 - 6月22日（土） 7:52 東京駅発 → はくたか553号 → 9:17 上田駅着
 - <帰り>
 - 6月22日（土） 17:21 上田駅発 → あさま628号 → 18:52 東京駅着
- ・内 容
 - 10:00 ～ 10:45 開会行事・記念講演
 - 11:05 ～ 12:30 分科会プレゼンテーション①
 - 12:30 ～ 13:30 昼食および交流【上田城址公園】
 - 13:50 ～ 15:15 分科会プレゼンテーション②
 - 15:30 ～ 16:00 閉会行事
- ・分科会テーマ
 - I 信州発いのち・健康フォーラム
 - II 地域の課題から地域創生を提言
 - III グローバル課題から解決策を提言（使用言語：日本語）
 - IV グローバル課題から解決策を提言（使用言語：英語）
- ・参加生徒 13名（4年生女子6名・5年生女子7名）
- ・引 率 1名（国語科）
- ・事前指導担当 SGH委員会
- ・本校生徒発表テーマ
 - 「日本における外国人観光客の医療機関の利用」
 - 「児童の自己肯定感の改善」
 - 「日本人の社会貢献活動意識の向上」
 - 「多様な価値観を認め合う授業づくり」
 - 「障がい者と健常者の相互理解を促す交流と共同学習の実施」

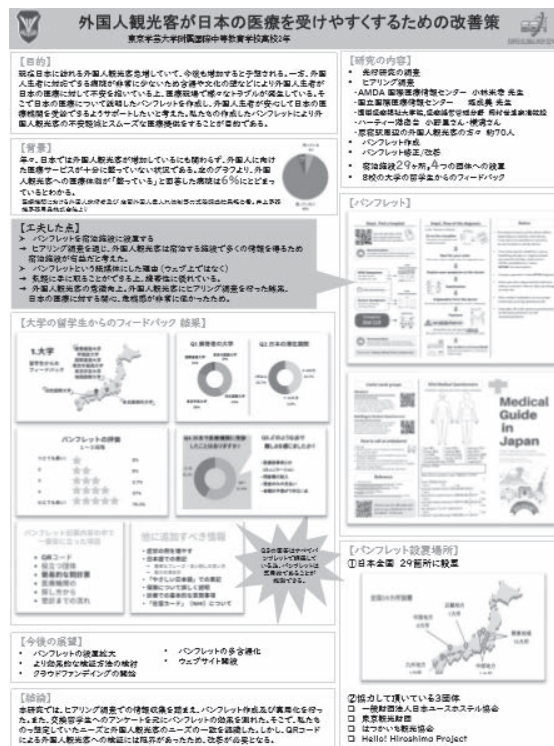
(3) 事後の展開

上記発表者の5チームは本校の課題研究コンペティション「ISS チャレンジ」において、4年生の1組がファイナリスト4組の中の1組に、5年生2組と4年生2組がセミファイナリスト15組の中にそれぞれ選出された。その中の「日本における外国人観光客の医療機関の利用」が研究テーマの5年生チームは、「一般財団法人日本ユースホステル協会」をはじめとする様々な宿泊施設などと連携し、全国約30ヶ所に自分たちが手掛けた外国人旅行者向けの医療用パンフレットを設置させてもらうなど、研究を実践につなげている。

下図は実際に設置しているパンフレットと発表ポスターである。



(「Medical Guide in Japan」外国人向け医療パンフレット)



(「外国人観光客が日本の医療を受けやすくするための改善策」発表ポスター)

② アジア高校生国際会議 (Global Discussion)

今年度は本校から3名が参加した。この会は英語を基本として行われるが、スキルとしての英語力向上のみを目指すのではなく、他者に対し論理的に英語で表現することを通じてコミュニケーション能力を向上させ、課題発見力・課題解決力・合意形成力・妥協力を育成することを目的に実施されている。今年のディスカッションテーマは「2030年の社会 ～ SDGs 展望と課題 ～」。より良い2030年の社会を実現するためには何が必要であるのかをSDGsの視点に立って議論した。

(1) 目的

加速度的に進むグローバル化に際して、経済学を中心とした社会的な視点からの学びの中で、自分たちが将来の国際社会で活躍するためにどのような資質・能力が必要なのかをアジアの高校生たちと一緒に考える。また全国から集まった高校生たちが学校を越えてチームを組み、英語でディスカッションをする中で、スキルとしての英語力向上だけではなく、他者に対し論理的に英語で表現することを通じてコミュニケーション能力を向上させ、課題発見力・課題解決力・合意形成力・妥協力を育成することを目的とする。

(2) 実施概要

- ・主 催 名古屋大学教育学部附属中・高等学校
- ・開 催 日 令和元年8月18日(日)～20日(火)
- ・会 場 名古屋大学教育学部附属中・高等学校 (愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学内)
- ・参 加 者 日本からの高校生約40名
外国人留学生約140名 (アジア架け橋生約120名・東海地区 AFS 留学生約20名)
高校・大学・団体スタッフ約40名
- ・使用言語 英語
- ・内 容 18日(日) 日本の高校生のみで事前学習・情報収集
19日(月) ①開会宣言・基調講演、名古屋大学 G30 の紹介
②割り振られたテーマに関して小グループでの討論
20日(火) 9:00 ポスタープレゼンテーション・大学教員による講評
11:45 南部生協で昼食
12:45 豊田講堂出発
13:45 大須商店街散策
15:00 名古屋城へ移動
15:45 名古屋城入城
17:30 解散
- ・事前学習
会に臨むにあたり、学校独自の事前課題として以下のことを設定した。

事前課題

以下の資料2点に目を通し、「日本」という国と「アジア」という地域が取り組まねばならないSDGsの目標(17個)、及びその中のターゲット(169個)それぞれから1つずつ取り上げ、なぜそれに取り組まねばならないと考えるのか、根拠を含めてそれぞれ800字～1000字程度でまとめなさい。

- ①「持続可能な開発目標(SDGs)とターゲット(「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」(外務省仮訳)より)」(<https://www.unicef.or.jp/sdgs/target.html>)
- ②小野田真二「持続可能な開発目標(SDGs)と実施のためのマルチレベル・ガバナンス」

アジアと日本が取り組むべきSDGsの目標

アジアではSDGsの第4目標「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」に取り組んでいくべきだ。

一つ目に、日韓を初めとする多くのアジア諸国では深い歴史を保持しており、歴史教育は未来の外交関係を大きく影響するため、被害者側と加害者側をよく考慮した透明性ある歴史教育の基盤を作っていくべきである。自国の偏見や感情的要素が含まれた歴史を教えることは、今後の世界平和にとって大きな障害をもたらす。全ての事柄に存在する因果関係をはっきりさせ、どんなに暗い歴史であろうと正直な他国の背景も教えることで、真に相手国を理解し、謝って許す姿勢を持てる次世代を育成することができる。

二つ目に、バングラデッシュ、インドネシア、ベトナム等ではゴミ山がよく見られ、その背景には環境汚染に対する国民の問題意識の欠如があるため、これもまた教育を通じて解決できる。不法投棄やオープンダンプ、またシステマティックなゴミ収集がないという現状は環境に悪影響をもたらしているが、多くの人々はこの深刻さに気づいていない。よって、環境教育を強化し、早い段階（初等教育など）から正しいゴミ処理法を習慣づけることで、国民が自ら問題に対応していける持続可能な社会を作り上げるべきだ。

三つ目として、教育システムの改善は国際移住の問題も解決することができる。現在、フィリピン、パキスタン、ミャンマーそしてインドでは多くの移民を送出しており、非正規移民、頭脳流出、移住先での困難への直面など様々な問題が存在している。しかし、フィリピンのドゥテルテ政権と同様に、移民問題を抱える国々の政府が積極的な教育支援を行えば、高技能移民の増加に伴う受入国数のインクリメント、さらには非正規移民の削減にまで繋がるようになる。また、教育が提供できるようにすれば頭脳確保による経済成長の実現を期待することができ、国民が移住を選別せず国内に留まったり、外国にいる高技能移民の帰還による最先端技術の導入が行われたりすると考えられる。さらには職業訓練プログラムの実施によって移民のカルチャーショックを予防することも、教育強化は可能にさせる。

これら3つの根拠より、SDGs第4目標への取り組みは他の社会問題も解決できる効果的で貢献価値の膨大なものだと考える。

一方、日本国内ではSDGs第5目標「ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う」に取り組むべきだ。

日本のジェンダー問題は国際社会の中でも比較的遅れをとっており、LGBTQに対する理解が不足しているだけでなく、女性の人権も未だに保護・尊重されていない現状にある。よって、国内では男女差別、特に劣等的存在としての女性を根絶させ、特に政治界や医療界において全てのジェンダー保持者が活躍していけるよう国全体が取り組んでいく必要がある。

(事前学習として提出されたレポートの抜粋)

(3) 生徒の参加動機と事後の展開

- ・生徒の参加動機—生徒Tのエントリーシートから

This year I have started a research which consists of analyzing how Japanese could become more tolerant of cultural differences. Thus, through the event, I would like to discuss about what level of consciousness do people in Japan or in other countries have of the necessity to adopt to globalization, and what can people do to be global players.

Moreover, I am looking forward to develop my skill on consensus building as I have often simply stated my opinions and never tried to consolidate or compromise in discussions.

- ・事後の展開

上記の生徒Tは課題研究において、他の生徒と「不登校を生む日本人の異文化に対する不理解の原因」というテーマで共同研究を行っている。本校生徒へのアンケートを通じて、異文化への「理解」を促すためには異文化への「嫌悪」の感情に向き合う必要があるかも知れないという気づきのもと研究を進めている。以下にその要旨を掲げる。

生徒論文要旨 テーマ：「不登校を生む日本人の異文化に対する不理解の原因」

少子化が進む中で不登校児童数が年々増加しているという事実は日本の社会問題の一つである。不登校になる最大の要因として人間関係の問題が挙げられるが、不登校を生む人間関係の不和は生徒間の異文化への不寛容性が原因と考えられる。そのため本研究では異文化不寛容の原因を生徒たちの心理傾向から分析し、異文化理解を可能にすることで学校での対人関係の問題を減少させ、不登校問題の解決を図る。心理傾向について先行調査からいくらか見当をつけたのち、仮説の検証と分析手段として高校1・2年生を対象にアンケート調査を実施した。結果として、登校意欲に関連するのは異文化への「理解」ではなく異文化に対する「嫌悪」の程度ではないかという気づきを得た。異文化嫌悪を解決（ひいては不登校問題を解決）する手段として異文化理解があるという可能性を見出した。そして、登校意欲の改善に最も関係性の強い「異文化嫌悪度」を減少させるためには、アンケート結果の分析で関連性が見られた「異文化理解度」、「コミュニケーション能力」、「自己肯定感」、「他人からの影響のされやすさ」について考慮すべきであることが分かった。

③ 「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道

本サミットに、本校は高知県で行われた第1回開催（2016年度）以来毎年参加しており、今年で4回目となる。今年度は課題研究で防災や原発問題などをテーマとしている3名の生徒で参加した。国内外問わず様々な地域から集まった高校生たちから本校の生徒は大きな刺激を受け、議論に応じ、自身のその後の課題研究に生かすことができた。

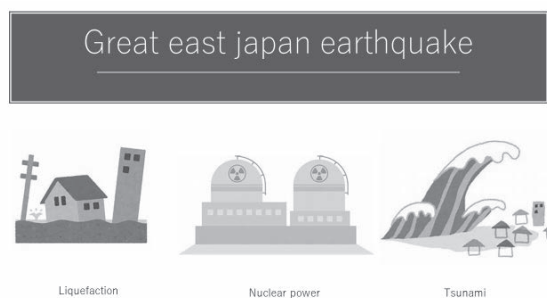
（1）目的

2015年12月、国連総会で「世界津波の日」（11月5日）が採択されたことを受けて、高校生の防災意識向上のために開設された高校生サミットであり、本校は今回で4回目の参加となる。過去の参加において生徒は国内外の生徒と充実した交流の機会を得、課題研究への理解の深化を図ることができた。こうした経験を踏まえ、今年度も他校の生徒たちと交流を持ちながら自然災害のリスクにどのように対応するかについての理解を深める機会や課題研究に関連する発表を行う場として活用することを目的とする。

（2）実施概要

- ・主 催 北海道、北海道教育委員会
- ・開 催 日 令和元年9月10日（火）・9月11日（水）
- ・会 場 北海道立総合体育センター「北海きたえーる」（札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1）
- ・参 加 者 海外招聘者（生徒+引率）約260名（43ヶ国）、国内参加者（生徒+引率）約250名（68校）
- ・使用言語 英語
- ・内 容 全体テーマ “記憶を未来へ、備えを明日へ”
～北の大地からイランカラッテ。自然災害の脅威と対応を学ぶ～
分科会テーマ ① 知識を得る ～過去の教訓の伝承（参加）
② 意識を高める ～災害への備えと迅速な避難
③ 復興に向け共に行動する ～社会貢献、被災当事者と支援者の視点

本校生徒の発表スライド（抜粋）



外国の生徒たちと話し合いを行う中で、今まで当たり前だと思っていた避難訓練や、非常食などを蓄えておくということが諸外国では全く行われておらず、やはり日本は防災に力を入れているのだと気づくことができた。一方で、こうした防災について議論を交わしているうちに、幼い頃から何度も行ってきたため「避難訓練」という活動が「訓練」として形骸化されてしまっているようにも感じられた。今回のサミットで改めて日本の災害の多さを認識し、防災に対する意識を高めなくてはいけないと感じた。

様々な国で災害やそれについての防災がどのように捉えられているのかを知ることができ、とても良い刺激となった。諸外国の学生と交流する中で、議論を交わしながらそれぞれの問題についての共通認識と、国によっても様々に異なる防災の状況について確認できたことは自分の研究に繋げる上でも大変興味深い学習となった。今後も海外の人々と広く交流しながら自らの知見を広げていきたい。

④ 長野県上田高等学校・清教学園高等学校との交流

(1) 目的

SGH 校同士の取り組み状況や情報を交換し、相互の研究を図る。また生徒同士の交流を通して、課題研究への理解の深化を目指すとともに、同じ問題意識を持つ同世代のネットワーク構築を図る。

(2) 実施概要

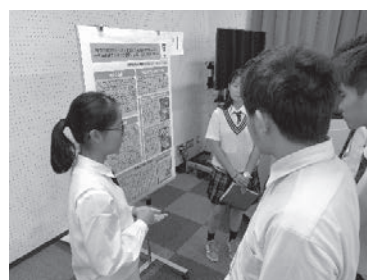
長野県上田高等学校との交流

- ・実施日 令和元年9月12日 12:20 ～ 15:10
- ・実施場所 本校施設 E201
- ・来校人数 長野県上田高等学校 生徒 40 名（高校2年生）＋教員 2 名
- ・当日日程
 - 12:20 ごろ 長野県上田高等学校、本校に到着
 - 12:25 ～ 昼食交流
※本校の SGH 分野で研究を行っている生徒と交流
 - 13:05 ～ 本校についての説明
 - 13:15 ～ 長野県上田高等学校の生徒による
本校教員へのインタビュー
国語科 1 名・社会科 2 名・数学科 2 名
理科 1 名・外国語科 2 名・技術科 1 名
 - 14:05 ～ 長野県上田高等学校の生徒による
本校授業の見学
授業参観：5 年 DP 国語、6 年地理、6 年政治経済
授業参加：6 年 DP 化学、4 年保健、
5 年コミュニケーション英語
 - 15:10 終了



清教学園高等学校との交流

- ・実施日 令和元年10月9日 15:30 ～ 18:00
- ・実施場所 本校施設 E201
- ・参加人数 清教学園高等学校 生徒 44 名（高校2年生）＋教員 2 名
本校生徒約 40 名
- ・当日日程
 - 15:30 ごろ 清教学園高等学校、本校に到着
 - 15:40 ～ 両校挨拶・アイスブレイキング
ポスターセッション準備
 - 16:05 ～ 17:00 ポスターセッション
16:05 ～ 16:30 ポスターセッション グループ A
16:35 ～ 17:00 ポスターセッション グループ B
(ポスター発表 5 分＋質疑応答 3 分×3 回)
 - 17:10 ～ 17:50 グループディスカッション
①貧困 ②水・環境・気候変動 ③健康・福祉・医療・産業
④教育・文化・言語 ⑤平和・人権・ジェンダー
※上記①～⑤のいずれかのテーマを選んで
グループごとにディスカッション
 - 18:00 閉会・写真撮影



グループA		グループB	
日本のリサイクル問題とDIY人気と結びつけることができるか	清教学園	ICTを用いて教育を良くする方法は？	清教学園
どうして国際的に海洋ゴミが注目されているのか	清教学園	迫り来る蚊の脅威に人類は対抗できるのか	清教学園
子どもの相対的貧困について	清教学園	児童労働はなぜ減らないのか	清教学園
ハンセン病と差別	清教学園	綺麗で安全な水を得るためには	清教学園
都市化による生態系の変化	清教学園	戦争について	清教学園
性に関する差別をなくすことは可能なのか	清教学園	MY book project -フィリピンの教育問題のために私たちができることは何か-	清教学園
日本人の英語水準に対する改善策は出ているのに、なぜ改善されていないのか	清教学園	効果的な算数の授業をデザインする	国際中等
都市農業プロジェクトを通じた地域参画意識の研究 -日本のボランティア意識の変革を図る仕組みとは-	国際中等	日本で水道を民営化することについてみんなの意見を促す意識改革の提案	国際中等
市民として未来を構築するための歴史教育を考案・実施する	国際中等	ワークショップを通じたインクルーシブ教育の理解度向上	国際中等
算数と数学のギャップを埋めるには	国際中等	学校ビオトープ有効活用のための再生・管理の実践	国際中等
子どもの貧困対策における複合的なアプローチの効果の検証	国際中等	外国人観光客が日本の医療を受けやすくするための改善策	国際中等
スタートアップで考えるe-sportsへの取り組み	国際中等	ドキュメンタリー作品による日本の原子力発電に対する意識改革	国際中等
ICTを活用した異文化理解の促進	国際中等	高校生におけるごみの減量に対する消費者としての行動の改善	国際中等

(3) 成果と課題

<成果>

- ・長野県上田高等学校との交流は昨年度に引き続き行われたが、インタビューを受ける教員の数やその後受けてもらう授業の講座数をより幅広いものとしたことで、本校の教育の特色をより理解してもらうことができた。
- ・清教学園高等学校との交流では、両校でポスターセッションを行うことでそれぞれの学校でどのように研究が行われているのか、その状況を共有することができた。またグループディスカッションでは、国際性を重んじる両校の生徒たちが広い視野をもって、様々な社会的課題について意見を交わすことができた。
- ・教員同士の交流の中で、指導方法や経験のための場の設定について意見を交わすことができ、情報を共有することができた。

<課題>

- ・長野県上田高等学校との交流は生徒と教員との交流が主なものとなり、生徒間の情報や意見の交流に乏しかった。先方の事情などもあったため難しい側面もあるが、放課後などの時間を使って生徒間の交流を促したい。

⑤ エシカル甲子園 2019

本大会は、今年度初めて行われた徳島県教育委員会・徳島県・消費者庁が主催する全国初の「エシカル消費」をテーマとする大会である。全体発表はかなわなかったものの、本校からは4年生の2名の生徒が参加した。全国から集まった高校生たちに大きな刺激を受け、意見を交わしたことから自身のその後の研究に生かすことができた。

(1) 目的

エシカル消費についての学習や取り組みの状況・成果に関して情報交換する。また生徒同士の交流を通じてエシカル消費への理解の深化を目指すとともに、同じ問題意識を持つ同世代のネットワーク構築を図る。

(2) 実施概要

- ・主 催 徳島県教育委員会, 徳島県, 消費者庁
- ・開 催 日 令和元年12月27日(金) ※12月26日(木)に交流会
- ・会 場 徳島グランヴィリオホテル(徳島県徳島市万代町3-5-1)
- ・参 加 者 約350名(参加校数約30校)
- ・使用言語 日本語
- ・日程・時程

12月26日

18:15 ~ 19:45 夕食・交流会

12月27日

9:45 ~ 10:00 開会行事

10:00 ~ 12:00 発表(前半)

12:00 ~ 13:00 昼食

13:00 ~ 14:00 発表(後半)

14:00 ~ 14:15 休憩

14:15 ~ 15:00 講演 ※武井安由知『『エシカル』を『実感するために』

15:00 ~ 15:30 閉会行事(表彰, 講評)



※掲示された生徒ポスター

(3) 参加生徒の振り返り(抜粋)

印象的だったのは、誰でもできることではなく、地域の魅力をPRするための地域ならではの活動がほとんどだったことだ。私達の活動において足りないのは地域ならではの、自分たちならではの個性を生かした活動だと思うので、他の人ではなく自分たちだからこそできることを考えて行動していきたいと思った。また、エシカル消費と言っても単純にレジ袋削減や3R、ごみの分別だけでなく、放置竹林や鳥獣問題、裂織りの伝統技術の後継者問題などを解決することもエシカル消費につながるのだという新たな知見が得られた。

発表校の活動は具体的で、直接的にエシカル消費が行われているのがわかるようなものだった。発表校の発表を聞いて、私たちの活動は抽象的でエシカル消費との繋がりがわかりにくい部分もあり、カンボジアを対象としているので、活動によって本当にエシカル消費が促進されているのか、活性化されているのかデータが取りにくいと感じた。この部分は今後改善すべき問題点であり、エシカル甲子園に参加したことで、活動の課題・改善すべき点を見つけることができた。また、発表校の活動から商品を開発し、地産地消を促進することでエシカル消費につながられるという新しい見方も学ぶことができた。しかし、普通科である私たちの学校は商業科や農学科がある学校に商品開発という面で、劣ってしまうので普通科だからこそできる、普通科でもできるエシカル消費を考えていく必要があると感じた。